



澤野 雅樹教授 (専攻 犯罪社会学)



(1) 社会学とはどのような学問とお考えですか。

どうやら私は社会学者とは思われていないようだ。出荷元が社会学だったにすぎない。社会学科には出所が社会学でない人もけっこういる。そういうところが社会学であり、社会学科なのかもしれない。

ならば、社会学とは融通無碍で、漠然といろいろな人がいて、さまざまなことを研究しているところかということ、そうでもあり、そうでもない。社会学は当然ながら、社会に起こる事象全般を扱うが、対象領域は人間の社会であり、視線の先にあるのも人間の営みに限られる。ここがちょっとした痛点なのだ。

今や自然科学者たちが人文系の問題群に取り組みはじめ、大胆な仮説を発表している。生物学者や地質学者が人類や文明に警告を発する一方で、社会性昆虫など「社会性」の名を冠した動物の研究を、社会学者は生物学者に任せきりにしてきた。どうしたことか？

人文科学の諸領域は、間もなく自らの営みを根底から問い直さざるを得なくなるだろう。関心の的を「人間」の枠内にとどめるか否かを含めて岐路に立たされる。そのときに向かい合わなければならない問いは、学問分野の生き残りを賭けるとともに、人間の生き残りについての賭けをも含むものとなるだろう。

(2) 先生が専攻されている、あるいは、この大学で学生に教えられている社会学とはどのような学問ですか。

大学では「犯罪社会学」と「暴力の論理学」という講義を担当している。

たぶん普遍的な犯罪はない。普遍的な禁止もない。人類の全体に行き渡っているように見える禁止さえ、しばしば解除される。例えば、人は普段、殺人犯を声高に非難するが、戦争が始まれば禁止が解除され、敵の兵士を殺すよう命じられ、大量殺戮が賛美される。殺人事件を声高に非難するその人が「遺族感情」を楯に死刑という国家による殺人を懇願し、殺害の遂行に感謝することさえ珍しくない。

また、法がない社会では、そもそも犯罪という観念すら生まれようもない。その種の社会に暮らす人たちには罪責感もなく、それゆえ日常的に裏切りと報復が横行することになる。

法と犯罪は人類にあまねく行き渡っているわけではない。倫理や道徳もそうだ。サザエさんの主題歌に「お魚くわえたドラネコ」をサザエさんが追いかけるくだりがあるが、ドラネコに加害の意図はなく、単に空腹だったにすぎない。ドラネコは魚を盗ったけれども悪いとは微塵も感じない。それゆえネコに良心の疚しさを期待するのはバカげている。

犯罪は、国家を前提としている。言い換えるなら、犯罪とは法と一緒に制定された観念である。しかも「加害の意図」や「罪責感」というローカルな感情のあることを前提している。今後、我々が、国際社会という舞台においても、行為の有罪性を問題にしようとするれば、西欧ローカルな宗教意識（有罪性、罪責感）との結託を、ともすれば国際規模で強要しかねない。

大事なものは次の一点だ。二一世紀以降、法秩序に絡む問題はすべて、二〇〇四年九月、当時の国連事務総長だったアナン氏が口にした「法の支配は今、世界中で危機に瀕している」という発言から汲み取れるあらゆる含意とともに考察を進めなければならない。

(3) 1～2年次で読んで欲しい本

1. 『オイディプス王』(ソポクレス 岩波文庫ほか) ギリシア悲劇の代表作。物語が素晴らしいのは言うまでもないが、数千年にわたって文学をはじめ、さまざまな学問に大いなる靈感を与えてきた点でも、避けては通れない。精神分析におけるエディプス・コンプレックスの概念はもちろん、レヴィ＝ストロースによる構造分析など例を挙げればきりが無い。ちなみに同じ作者の『アンティゴネー』(岩波文庫で読める)も『オイディプス王』に劣らず重要な古典である。真に悲劇的なのは、事の始めにギリシア悲劇を知ってしまったことだ。その降の演劇にとっての災難という意味で。
2. 『ガリヴァー旅行記』(ジョナサン・スウィフト 岩波文庫) 子ども向けの滑稽な物語と思っている人たちは是非とも読んでおこう。当時のイギリス社会を風刺しているだけでなく、その批判の矛先が現代日本にまで届いている書物である。とにかく辛辣かつ危険な本だが、そのヤバさこそ文学の真髄であろう。危険な文学の系譜を辿りたい人のために他の作品も幾つか挙げておこう。マルキ・ド・サド『ソドムの一二〇日』(青土社)、オスカル・パニッツァ『性愛公会議』(『パニッツァ全集』所収、筑摩書房)、アントナン・アルトー『ヘリオガバルス』(白水社)、ジョルジュ・バタイユ『眼球譚』(二見書房)といったところか。
3. 『審判』(フランツ・カフカ 角川文庫) カフカの代表作。できれば『城』(新潮文庫)も読みたいところ。かつて『アメリカ』の表題で訳されていた作品も新たに『失踪者』の表題で出ている(白水uブックス)。短編集もお勧め。色々な読み方ができるのもカフ

カの魅力だ。興味をもったなら、次はカフカ論に挑むのもいいだろう。

4. 『知識人とは何か』(エドワード・W・サイド 平凡社 1995)
パレスチナ系の英文学者、サイドが学問や研究を生業とする者(知識人)の姿勢を再考し、ありうべき方向を提示した本。専門分野に閉じこもり、いいように権力に利用されてしまうタイプの知識人(御用学者と呼ぶ)を批判し、専門分野を越えて学問の批判的な機能を果たそうとする知識人を擁護する。カントの「啓蒙とは何か」や、マックス・ウェーバーの『職業としての学問』(岩波文庫)と比較しても面白いし、晩年のサイドが殊に親近感を寄せていたドゥルーズの『記号と事件』(河出文庫)などと併せて読んでも面白い。
5. 『指輪物語(全6巻)』(J・R・R・トールキン 評論社) 巷に溢れるファンタジー文学や、『ドラクエ』『FF』などRPGゲームの原点に位置づけられる物語。全く知らない人は、前史にあたる『ホビットの冒険』(岩波少年文庫、上下巻)から読み始めるのもいい。著者のトールキンはオックスフォード大学で言語学の教鞭をとっていた大学教師。同僚の集まりにC・S・ルイスもいて、執筆中の『指輪物語』の朗読に刺激され、『ナルニア国物語』(岩波少年文庫、全7巻)を構想したという逸話もある。たった一人の想像力でここまで広大かつ細密な世界を創造し得たことにも驚きを禁じ得ない。全巻を読破したとき、映画『ロード・オブ・ザ・リング』三部作ですらダイジェスト版にすぎなかったことに気づかされる。
6. 『ホット・ウォーター・ミュージック』(チャールズ・ブコウスキー 新宿書房) つべこべ言わずに読んでみる。最初は、小説であれエッセイであれ、短い文章がたくさん詰まった本から入るのがいい。文庫化されているものもたくさんあるので、適当に見つくりつつ読んでみよう。『ホット・ウォーター・ミュージック』が本屋にない場合は、『町でいちばんの美女』(新潮文庫)、『ありきたりの狂

気の物語』(ちくま文庫)、『ブコウスキー・ノート』(文遊社)、『くそつたれ！少年時代』(河出文庫)等、何でもいい。要は、ブコウスキーの文章が自分の趣味に合うか合わないかを確認することである。教訓らしきものが何もないただの文章がそこかしこに転がっている。笑い、酔い痴れることができたなら別の本に手を出せばよい。もしもブコウスキーが「お下劣で嫌い」なら、今度はリチャード・ブローディガンを手にとり、『西瓜糖の日々』(河出文庫)や『アメリカの鱒釣り』(晶文社)に向かってみよう。

7. 『死亡遊戯』(藤沢周 河出文庫) 物語よりも彼の書く鋭利な文章を味わってほしい。小説の中で、言語はいったい何をしようとしているのか、何を指し示し、何を微分しようとしているのか。「著者は何を言いたいのか」という愚かな問いかけから足を洗い、文章がいったい何をしているのかという観点に移らないと、藤沢の書くものの真価はわからないだろう。他にも芥川賞受賞作の『ブエノスアイレス午前零時』(河出文庫)などがある。私的な話になるが、藤沢はわたしが大学生の頃からの友人であり、『死亡遊戯』の文庫版でわたしが「解説」を書いたのは、青臭い学生時代、酒の席で冗談めかして語っていた夢が図らずも現実になったことの証である。
8. 『素数の音楽』(マーカス・デュ・ソートイ 2013年 新潮クレスト) 試験監督をしていると睡魔に負けそうになるときがある。私はノートに素数を書き込んだ紙をもっていて、それを取り出し、空欄に入る数の素因数分解を始める。するとなぜか数秒のうちに目が冴える。たとえば、紙片の1577に相当する空欄には「 19×83 」と記入されている。その一行上には素数「1567」がどんと身構えている。そして考える。素数には規則や秩序があるのだろうか。その解(ただし未解決)がいわゆるリーマン予想だ。本書は数学史上最大の謎と言うべきその核心にぐいぐい迫っていく途轍もなく美しい本である。ソートイにはほかにも『シンメトリの地図帳』や『知の果てへの旅』(ともに新潮クレスト)という

面白い本が目白押しだ。ついでにもう一冊、『「無限」に魅入られた天才数学者たち』(アミール・D・アクゼル ハヤカワ文庫)を挙げておこう。『ウラニウム戦争』(青土社)でも知られる著者だが、ここでは集合論の創始者であるカントールと不完全性定理のゲーデルを精神の病に追い込んだ数学の魔物が扱われている。カントールとゲーデルを襲ったのは「無限」というモンスターであり、その底無しの深さには空恐ろしささえ感じさせられるだろう。こちらも数学嫌いの人にお勧め。

9. 『ファスト&スロー(上・下)』(ダニエル・カーネマン ハヤカワ文庫 2014) 2002年にノーベル経済学賞を受賞した心理学者の代表作。当人は経済学の単位を取ったことすらない生粋の心理学者。なのにどうして経済学でノーベル賞を取れたのか? その理由を知りたければ本書を読むべし。21世紀の経済学と心理学の出発点はまちがいなくここにある。フロイトの『夢判断』の21世紀版と言ってもよい。2016年のノーベル経済学賞受賞者、リチャード・セイラーはカーネマンの弟分。気になる人は『セイラー教授の行動経済学入門』(ダイヤモンド社)と『行動経済学の逆襲』(早川書房)を手にとるべし。
10. 『生命 40億年全史(上・下)』(リチャード・フォーティ 草思社文庫 2013) 先ずは続編の『地球 46億年全史』(草思社)を手にとり、渡辺政隆氏による「訳者あとがき」を読んでほしい。あるホームレスの老人から読者カードが版元に寄せられた。その老人は街灯か月明かりをたよりに文字を追った後、夜空を眺め、いったい何を思っていたのか。たぶん数十億年に及ぶ悠久の歴史に思いを馳せながら、自分の生命が歴史の一コマとして、今、ここに、たまたま瞬いているという感覚だったのではないか。それにしても、イギリスの生物学者たちは、どうして叙事詩を紡ぐことに、あんなにも長けているのだろう……。

(4) 3～4年次で読んで欲しい本

1. 『エチカ』(スピノザ) 一挙に読破しようとか、すぐに理解しようと考えてはならない書物。岩波文庫から上下巻で出ているが、中公クラシックスの工藤訳の方が読み易い。工藤はドゥルーズ『スピノザと表現の問題』(法大出版局)の訳者でもある。わかりやすい入門書から入りたいという向きには、上野修『スピノザの世界』(講談社現代新書)、『スピノザ『神学政治論』を読む』(ちくま学芸文庫)がお勧め。スピノザの存命中に出版され、大スキャンダルを引き起こした『神学・政治論』をこれ以上は望めないというくらい明晰に説き明かしている後者は、絶品料理の味わい。次に進むとしたら、たぶんジル・ドゥルーズ『スピノザ——実践の哲学』(平凡社ライブラリー)しかない。これらを読んで何かを渴望する気持ちが湧いて来たら、熱が冷めないうちにスピノザに向かうべし！
2. 『言葉と物』(ミシェル・フーコー 新潮社 1974) おそらく二〇世紀後半で最も話題になった思想書であろう。『狂気の歴史』や『監獄の誕生』など他の主著が社会学に役立つ内容を含むとすれば、『言葉と物』は社会学的な思考が歴史の一時期に位置づけられてしまった本である。大袈裟な言い方をすれば、彼が規定した思考の条件を越えられなければ、社会学の未来もない。
3. 『千のプラトー』(ジル・ドゥルーズ＋フェリックス・ガタリ 河出書房新社 1994) 初期の社会学が孕んでいた野蛮な可能性はあらかた、この哲学書が実現してしまった。わたしの乏しい読書経験の範囲で言えば、社会学の中ではロバート・K・マーソンの『社会理論と社会構造』が一冊の本としてはもっとも豊かな道具箱だったが、その多彩さを軽く凌駕する桁外れの本である。例えば、「言語学の公準」と題された賞の数十頁だけでも言語をめぐる既存の思想や科学の流れを刷新するだけの力を持つ

ている。ちなみに「言語学の公準」を読むための参考書を幾つか挙げておけば、『言語と行為』(J・L・オースティン 大修館書店)、『一般言語学の諸問題』(エミール・バンヴェニスト みすず書房)、『知の考古学』(ミシェル・フーコー 河出文庫)である。(あと、これはあまり指摘したくなかったのだが、文庫化を経てもまだ直っていないので、冒頭の「リゾーム」中の重要な一文が抜けていることだけ言い添えておく。)

4. ハナ・アーレント『全体主義の起源 I～III』(ハナ・アーレント みすず書房、1972～1974年) 歴史を読むということは、私たちが生きている時代を問うことに直結している。本書は21世紀の世界がアーレントが見据えた時代と地続きであり、同じ断層に脅かされていることを教えてくれる。昨今は20世紀を振り返る仕事も多く、たとえば『21世紀の資本』(トマ・ピケティ みすず書房)も経済史からの提言という以上に、経済格差の社会史として読むことができる。もっと激しいのがお好みなら、ニール・ファーガソンの『憎悪の世紀(上・下)』(早川書房)という大部でヘヴィーな20世紀史もある。ティモシー・スナイダーのコンパクトな本、『On Tyranny: Twenty Lessons from the Twentieth Century』(Tim Duggan Books)は、英語に学びつづけるためにも使えるが、1932年にナチスに投票したドイツ人も、1946年にチェコスロヴァキア共産党に投票したチェコ人やスロヴァキア人も、それが最後の選挙になるとは思っていなかったという一節には忘れがたいものがある。
5. 『恋する虜』(ジャン・ジュネ 人文書院 1994) ジュネの遺作。そしてたぶん最高傑作。何の前提もなく、これだけを読むと、おそらく何が何だかわからない。途中で挫折したくなければ。パレスチナ問題を扱った新書を数冊買い込んで、それらを全部読んでから、今度は噛みしめるように読んでみよう。さらにもう一度はじめから。そうすれば、この本の真価が身に染みて、生涯手離

せなくなる。『シャティエラの四時間』という、『恋する虜』と対をなす小品も単行本化されているので、併せて読んでいただきたい。

6. 『過程と実在(上・下)』(ホワイトヘッド 松籟社 上・1984／下・1985) ホワイトヘッド自身は表の哲学史の伝統を標榜しているが、どう考えても裏哲学に属してしまう人である。表の系譜を代表するのがプラトン、トマス、デカルト、カント、ヘーゲルだとすれば、裏の系譜の代表格はパルメニデス、ドゥンス・スコトゥス、スピノザ、ライプニッツ、ニーチェとなる。『過程と実在』の内容が最も近いのは、おそらくスピノザの『エチカ』ではないだろうか。それら二つの大著はいずれもパルメニデスの「一」を揺り動かして「多」を導くことに原理的な水準で挑戦した。
7. 『ゼノン4つの逆理』(山川偉也 講談社 1996) パルメニデスの弟子にあたるのが、エレア派のゼノン。「エレア派の」と付けるのは、同じくらい有名な同名の哲学者がいるため(ストア派のゼノン)。エレア派のゼノンは、あのゼノンのパラドクスで有名な人である。私が読んだ本のうち、ゼノンのパラドクスの内容とその可能性を最も深い水準で説明した本がこれである。参考文献としてはプラトンの『パルメニデス』(プラトン全集第4巻、岩波書店)が最適であり、またベルクソンの『時間と自由』や『物質と記憶』(白水社の個人訳全集が無条件にお勧めだ!)なども併せて読んでみよう。彼がゼノンを批判すればするほど、逆にエレア派の思想に近づいてゆくのがわかる。
8. 『ニーチェと悪循環』(ピエール・クロソウスキー 哲学書房 1989) 膨大な数にのぼるニーチェ研究の中の最高峰であると同時に最難関の本がこれ。ハイデガーの『ニーチェ』(I～III、白水社)やドゥルーズの『ニーチェと哲学』(国文社、河出文庫)さえ明快に過ぎると感じられる超弩級の思想書だが、わかりにくい理由はニーチェにあるよりも、むしろクロソウスキーにある。彼の本に立ち向かう度に、まだ私はキリスト教がわからないと思うし、クロソウスキーがわからないうちはキリスト教の深みが見えて

いないと考える。扱われているテーマはニーチェの人生と思想とを一方を他方に還元することなく正確に重ね合わせることである。ニーチェが絡んでいるので、難解と言われながらもこの本はそれでもわかりやすかった。ニーチェの怪しい波動が渦巻く二〇世紀前半の思想については多くの研究書があるが、とりわけマックス・ウェーバーとの関係を論じたものとして『社会科学の現在』(山之内靖 未来社)に注目したい。

9. 『啓蒙の弁証法』(ホルクハイマー＝アドルノ 岩波文庫 2007年) 言わずと知れた「隠れた名著」であることによって有名になり過ぎた本である。実際、同時代にファシズムの本質をあそこまで突いた点は見事だろう。しかし、そんな骨董趣味で済むなら、いっそ読まない方がよい。そして、どうせ読むのなら、ホルクハイマー＝アドルノの「啓蒙」概念とウェーバーの「脱呪術化」を比較してみるといい。さらには『不死のワンダーランド』(西谷修 青土社)を読み、ウェーバーやアドルノ、ハイデガーなどドイツ産の思想をレヴィナス、バタイユ、ブランショなどのフランス産の思想に繋げて考え、再び20世紀の怪物たち(ファシズム、共産主義、世界戦争など)をじっくり考察してみるのもよい。
10. 『生命の〈系統樹〉はからみあう』(デイヴィッド・クオメン 作品社 2020年) 私たちが今、もっとも知るべき、もしくは情報を更新すべき分野はウイルス学だろう。感染症だけでなく、ワクチン製造やゲノム編集の分野でもウイルスが今、もっともホットな存在なのだ。もう一冊挙げるなら、山内一也『ウイルスの意味論』(みすず書房)が最適。生命と身体の意味に迫りたいなら、ニック・レーンの『ミトコンドリアが進化を決めた』と『生命の跳躍』(いずれもみすず書房)がすばらしい。ダーウィンの『種の起源』(岩波文庫)や『人間の由来』(講談社学術文庫)の21世紀版を満喫したいなら、『生物はなぜ誕生したのか』(ピーター・ウォード&ジョセフ・カーシュヴィンク 河出書房新社)で決まりだ。

(5) 先生の代表的な著書または論文を二つか三つ教えてください。

以下の二冊は、同じ人が書いたのかと言われるくらいテーマが異なるが、もちろんどちらも私が書いたものだ。

1. 『絶滅の地球誌』(講談社選書メチエ 2016) 世界の現在と人類の未来を展望するためのやや厚めのガイドブック。問題のスケールが大き過ぎると感じられるかもしれないが、真に必要な「一般教養」は、この本で扱った問題圏に飛び込むところから始まるのではないだろうか。帯の「全地球人、必読の書！」というあおり文句はやや大げさに感じられるかもしれないが、執筆時はマジでそう思っていた。

諸君には、「今」が人類にとっての岐路なのだと、危機感を以て社会学を学んでほしい。

実際、人間は大丈夫なのか？

2. 『ミルトン・エリクソン 魔法使いの秘密の「ことば」』(法政大学出版局 2019年) しばしば「魔法」と形容されるミルトン・エリクソンの臨床の秘密に言語論の観点から迫った本。対象領域は精神医学や臨床心理学になるだろうが、アプローチの仕方からすると言語哲学、または哲学や言語学を駆使した言説分析となるだろう。

平明な文章だけど、あまりくどくど説明していないから、気を抜くと置き去りにされると忠告しておこう。うまくスピードに乗れるとそのまま「魔法」の深みに連れ込まれるだろう。できれば二度読んでほしい。二周目にはややちがう風景が見えてくると約束しよう。そういうふうにしたので。
